



学校だより

ひびき

令和5年9月29日

10月号

昭和54年3月3日制定

横浜市立獅子ヶ谷小学校

学びの転換

校長 大塩 啓介

9月、新潟の小学校の授業を見る機会がありました。本校が文部科学省から指定を受けているリーディングDX推進のための視察でした。電子端末（タブレット等）を学習にどのように活用していくのかはまだまだ未知数であり、全国の様々な学校において試行錯誤しながら進められています。新潟市はそれが進んでいる都市でしたので、横浜市教育委員会の指導主事と共に参観してまいりました。

午前中に伺った学校では、理科の授業を参観しました。天秤の学習で、どのようにしたら釣り合うのかを見つけていく授業でした。分銅の重さと、それをつるす位置を、端末に入力していくと、それぞれの班の結果がテレビに映し出され、リアルタイムで他の班の状況・結果が分かっているようになっていました。自分の班と他班の結果を比較することにより、試行錯誤が生まれ、班の中、あるいは他の班とのやりとりにおいて、児童同士の対話的な学びが発生し、深い学びへとつながっていました。

午後に伺った学校では、全学級の授業を少しずつ参観しました。全ての学級で端末を活用した授業でした。担任の先生方の個々の工夫が見られ、活用の幅を感じました。

以前からお伝えしておりますが、現行の学習指導要領に変わり数年が経ちます。コロナ禍の中で端末の活用が予定よりも進み、その中で、電子端末の学習の普段使いや家庭への持ち帰りにおいて、その利便性や有効性が言われています。しかし、学校現場の授業の転換はなかなか難しいものがあります。従来であれば資料提示ぐらいで活用していたものを、学びの中心に据えて利用していくようになってきています。その活用方法は、検索、思考ツール、プレゼンテーション、情報共有、作文、計算、記録（写真や動画）、グラフィック、ドリル学習等々、多岐に及び、そのアプリも様々なものがあります。では、ペーパーレスでいけるかと思えば、やはり紙と鉛筆、ペン、毛筆も必要という状況です。何をどれくらい活用していくのか、今まさに学校現場では試行錯誤しています。

こうした変化に加え、先ほどの学習指導要領においては、学習への主体性や学びの調整力など、学びに向かう姿勢も重視しています。これまでのみんなが同じことを同じようにできるようにする学びから、個別最適な学びへと転換しているとともに、対話的・協働的な学びが求められています。そのためのツールが現在使用しているタブレットということになります。おそらく、ここ3年のうちに、学校の授業は更に大きく変わるのではないかと予測しています。

コロナ禍は学びの転換を大きく進めていくきっかけとなりました。これからの世の中を背負っていく児童に期待し、新しい学びをもっと前に進めていきたいと思っています。